

藤原宮朝堂院東第四堂の調査(飛鳥藤原第144次)

4月から10月にかけて、藤原宮朝堂院東第四堂の建物と、その周辺の様子を明らかにする調査をおこないました。春(第142次)は建物の南半分を、夏は北半分を調査しましたが、北半分の残りが比較的良好で、多くの新知見が得られました。

最大の成果は、建物規模が予想していたよりも大きかったことです。東第四堂は、日本古文化研究所が戦前におこなった部分調査によって、東西4間・南北15間の規模に復原されていました。今回、東側にもう1間分伸ばした位置で、礎石を据えるための穴(礎石据付掘形)を3基確認したため、東西5間の規模であることがわかりました。

しかし、「東第四堂の規模は、東西5間 南北15間だった」と簡単には言い切れません。調査区の中で、後世の削平をほとんど受けていない部分がわずかに残っていましたが、そこでは東西4間分の基壇の高まりが確認されたのです。また、その高まりの外側には、東第四堂を解体した際に捨てたとみられる瓦が厚く堆積していました。

この状況は、建物の解体時、すなわち藤原宮から平城宮へ遷都する直前には、東西規模が4間であったことを示しています。すると、東第四堂は当初、東西5間・南北15間で、途中で東西のみ4間に縮められたことになります。

この規模の縮小が、第四堂建設前の「計画変更」か、それとも「建て替え」によるものかは重要な問題です。しかし、東西規模を5間から4間の建物に建て替えるのは、屋根をいったんはずさなければならない大工事であること、さらに建て替え時の廃棄瓦が認められないことなどから、調査員の所見は、5間分の

礎石据付掘形を掘った時点での「計画変更」説に傾きかけました。

ところが、調査も終盤にさしかかった頃。東西5間分の外側で、足場の痕跡(小穴)が検出されたのです。足場は、柱を立てる時や降ろす時に組まれるものですから、東第四堂は東西5間の規模でも柱が立っていた可能性が高まりました。

このように大きく解釈が揺れ動いた調査になりましたが、「建て替え」となると藤原宮朝堂院全体の問題です。今後、一層慎重に検討を進めたいと考えています。(都城発掘調査部 中川 あや)

飛鳥寺講堂の調査(飛鳥藤原第143・6次)

飛鳥寺中金堂の北方、来迎寺の塀新設に伴い講堂の西南隅を調査しました。講堂は50年前の調査で、桁行8間、梁行4間の四面廂付東西棟礎石建物で、玉石積みによる基壇外装をもち、周囲に玉石組の雨落溝があることがわかっています。

今回の調査では、南側柱の礎石を新たに3個検出し、以前確認していた1個も含め、調査区内にL字形に4個並んでいます。礎石の大きさは1.5mほどあり、径約80cmの柱座があります。柱間は、身舎部分で4.5m、廂部分では3.85mです。また、礎石据付掘形なども検出し、基壇の詳細な状況が明らかになりました。

中金堂に飛鳥大仏が安置されてから1400年、最初の調査で舍利埋納物が出土してから50年目にこのような壮大な遺構が姿を現したことは、感慨深いものがあります。一般の人の関心も高く、3日間の現場公開で約2100人が見学に訪れました。

(都城発掘調査部 玉田 芳英)



「5間目」の礎石据付掘形(右下・北西から)



検出した大型礎石(西から)